The Japan Lung Cancer Society

確定診断は困難で，多発結節例や急速増大例など肺癌との鑑別に注意すべき症例も認められた．

62．右上葉肺癌と声門下気管癌の重複癌に対する一期的手術の1例

佐賀医大胸部心臓血管外科
古川浩二郎，湊　直樹
内藤光三，須田久雄，小迫幸男
樗木　等，夏秋正文，伊藤　翼

64歳男性．右上葉S_3腺癌と声門下気管腺様嚢胞癌を同時に合併した，ごく稀な症例に対して一期的に手術を施行した．仰臥位頚部襟状，胸部正中切開にて右上葉切除を行い，次に声帯下2.5cmの所に腫瘍を認めたため中枢側後方は輪状軟骨内面の気管粘膜，前方は第1気管軟骨部にて切断，末梢側は第5気管軟骨下で切断し気管管状切除，端々吻合を行った．術後2週間の頚部前屈固定を行い，経過良好であった．

63．胸部レ線写真陰性の左肺門部肺癌を含む両側性同時性重複肺癌の1例

大分医大第3内科　佐藤義浩
吉村直子，渡辺純子，吉松哲之
鬼塚　徹，水城まさみ
青木隆幸，津田富康

最近，重複癌と診断される症例が増加の傾向にあるが，両側同時発生の原発性肺重複癌の報告は比較的まれである．今回我々はBrinkman Indexの高い，65歳男性に発生した両側性同時性肺重複癌の1症例を経験したので報告した．胸写上では右肺に腫瘤様陰影を認めたが左肺は陰性で気管支鏡検査にて左肺の病変を認めた．小細胞癌と扁平上皮癌からなる重複癌で，Brinkman Indexの高値から喫煙との関係が強く示唆された．

64．肺癌を含む重複癌症例の検討

鹿児島大第1外科　松本英彦
下高原哲朗，西島浩雄
三谷惟章，馬場国昭，島津久明

過去16年間に教室で経験した手術肺癌は282例で重複癌は26例(9.2%)，そのうち2重複癌は22例であり16例(72.7%)を肺癌先発型が占め，その場合症状発現により発見される例が多かった．また発生間隔は肺癌診断前後5年以内に集中し，重複癌臓器としては胃癌が最も多く次いで甲状腺，子宮癌の順であった．一方肺癌組織型では扁平上皮癌の頻度が高いことが特徴的であった．9例に肺癌絶対治癒切除手術が施行され，4例に生存を認めた．重複癌全体の5年生存率は48.7%であったが異時性重複癌では65.3%と予後良好であった．

65．原発性肺多発癌5例の検討

熊本地域医療センター呼吸器内科　深井祐治，千場　博
同　放射線科　吉岡仙弥
同　病理　蔵野良一
自衛隊熊本病院内科
柏原光介，中村博幸

昭和59年4月から平成元年5月までの期間で男性3例，女性2例の計5例であり，異組織型4例で，同組織型(腺癌)だった．同一組織型の腺癌の場合は肺内転移との鑑別が問題であり，谷村らの組織学的所見を参考に検討し，報告した．

66．腎癌との同時重複癌で，長期生存が得られている肺小細胞癌の1例

国療大牟田病院外科
黒田郷子，堀内雅彦，半井一郎

症例は76歳男性で，右下葉に異常陰影を指摘され来院．肺小細胞癌の診断後，転移検索中に左腎に腫瘍を認め，左腎全摘施行．さらに，肺小細胞癌に対してはCDDP, CQを中心とする術前化学療法を行い，その後右下葉切除を施行し，現在4年を経過している．

67．化学療法に対して興味ある経過をたどった同時性肺多発癌の1症例

国療大牟田病院外科
堀内雅彦，黒田郷子，半井一郎

右S^6末梢型扁平上皮癌及び左B^8a入口部小細胞癌の同時性肺多発癌の1例を報告した．化学療法に対して左側小細胞癌はほぼ消失し，CRが得られたのに対し，右側扁平上皮癌は進行性に増大しPDで，各々，化学療法に対して異なった態様を示し興味深い症例と思われた．

68．肺多発癌手術7症例の臨床的検討

九州大第2外科
金子　聡，立石雅宏
矢野篤次郎，光冨徹哉
石田照佳，杉町圭蔵

肺多発癌手術について臨床的検討を加えたので報告する．原発性肺癌手術患者中肺多発癌は7例(0.9%)であった．同時性肺多発癌は2例，異時性肺多発癌は5例であった．術式は第1癌に対しては全例葉切除を，第2癌に対して葉切除5例，部分切除2例を施行した．予後は1例に再発を認めたが，6例は再発を認めず生存中である．以上より肺多発癌は残存肺機能を考慮した積極的な外科治療により，良好な予後が期待できると考えられた．

69．特発性間質性肺炎合併肺癌の検討

長崎大第2内科
木下明敏，広瀬清人，谷口哲夫
早田　宏，力竹輝彦，鶴川陽一

NII-Electronic Library Service

The Japan Lung Cancer Society

九州支部

神田哲郎,原　耕平

特発性間質性肺炎(IIP)合併肺癌症例13症例について検討した．IIP合併肺癌群は，男性の高齢者に多く，全例喫煙歴があった．肺癌の発見動機は胸部異常陰影によるもの5例，自覚症状によるもの8例で，IIP発見から肺癌発見までの期間は平均36.5カ月であった．組織型では扁平上皮癌と腺癌が多く，臨床病期はIII・IV期例が多かった．またIIP症例のうち血清CEAが5ng/dl以上のものは肺癌合併群に特に多かった．IIP症例の経過観察にあたっては，胸部X線，CTのみならず，喀痰細胞診や血清CEAなども定期的に調べる必要があると考えられた．

70．肺癌併発感染症の臨床的検討

大分医大第2内科　重野秀明
黒田芳信,田中雄二,山崎　透
永井寛之,山崎仁志
後藤陽一郎,後藤　純
田代隆良,那須　勝

原発性肺癌146症例(延べ178症例)中72症例(40%)に106エピソードの併発感染症を認めた．感染症の内訳は気管支炎33.9%,肺炎・肺化膿症32.6%，閉塞性肺炎8.5%の順で，呼吸器感染症が全体の81%を占めていた．組織型では扁平上皮癌に，病期別ではIII・IV期に多くみられ，入院時にはH. influenzaeなどによる気管支炎が，終末期には真菌・グラム陰性桿菌による肺炎・敗血症が主な感染であった．

71．肺結核と肺癌の合併症例についての検討

国療熊本南病院内科
森　孝志,平岡武典,大村信正
手島安廣,島津和泰,弘　雍正
同　外科　武藤　眞
松枝和人,安尾博之

肺癌と肺結核の関連については，拮抗するものであるとする説，結核の瘢痕組織に肺癌が合併し易いとする説，合併は偶然であるとする説がある．今回，我々は，昭和59年から63年までの5年間に，活動性肺結核と肺癌の合併症例8例を経験した．これら8例中の腺癌2例については，手術時の組織所見等により，先行する肺結核の病巣に近接して肺癌が発生していることが確認され，その関連について今後も検討を要すると思われた．

72．骨・軟部悪性腫瘍肺転移の手術成績

福岡大第2外科　米田　敏
犬束浩二,山崎世紀,高田伸一
上田　仁,元永隆三,白日高歩
同　整形外科　葉山　泉

骨・軟部悪性腫瘍の肺転移に遭遇する機会は多いが，その治療方針は必ずしも一定していない．例えば骨肉腫肺転移では多発性転移巣であっても，延命効果を得る事が可能とされている．しかし，悪性腺維性組織球腫の多発性肺転移の手術成績は極めて不良のようである．今回，これまでに経験した骨・軟部悪性腫瘍の肺転移例のうち手術を実施した症例を集計し，それらの手術成績，臨床像をまとめてみた．

73．甲状腺乳頭癌切除10年後に発見され，6年の経過で消失した肺転移の一例

佐世保市立総合病院内科
勝又達哉,賀来満夫,増本英夫
荒木　潤,浅井貞宏

症例は55歳女性．昭和47年に甲状腺乳頭癌のため甲状腺切除術を受けた．昭和57年に胸部X線上両側下肺野に粟粒影を指摘され，経気管支鏡的肺生検の結果，甲状腺乳頭癌肺転移の診断を得た．その後，甲状腺末等の投与を受けていたが，粟粒影は次第に減少し昭和63年に胸部X線および胸部CT上ほぼ消失した．本症例は，甲状腺乳頭癌の肺転移巣が甲状腺末投与でほぼ消失したと考えられる稀な例である．

74．原発性肺癌縦隔リンパ節転移，とくに飛石状転移について

長崎県立島原温泉病院外科
篠崎卓雄,山口哲麿,山口　聡

一葉以上の切除を施行した原発性肺癌45例を対象とした．縦隔リンパ節転移の頻度は15.5%,腫瘍径3cm以下のものでは32例中3例，9.3%であった．飛石状転移の頻度は11.1%であった．小型肺癌でも縦隔リンパ節郭清の必要性が示唆された．

75．転移性肺腫瘍切除例の検討

熊本大第1外科　本郷弘昭
大熊利忠,近藤圭一郎
今岡秀俊,宮内好正

昭和56年以降当教室で経験した転移性肺腫瘍の切除例15例で検討した．15例中11例は非上皮性腫瘍由来で，中でも骨肉腫例が7例と最も多かった．予後をみると15例中7例が死亡し，肺転移巣切除後の平均生存期間は約1年で，tumor doubling timeでみると30日，disease free intervalが6カ月以内の症例の予後は不良と思われた．

76．腎癌の気管支内転移の1例

国立沖縄病院内科　嘉数朝一
仲宗根恵俊,久場睦夫
宮城　茂,宮国泰夫,大城盛夫
同　外科　石川清司
国吉真行,源河圭一郎
琉球大第2病理　岩政輝男

転移性肺癌において，その大

NII-Electronic Library Service